

マチの人、脳梗塞の人、その他の疾患の人もいる。リハビリ室は外来の人も加わるので、いつも満杯だ。ベッドの上や病棟の廊下も患者でいっぱいになる。そのほとんどは高齢者だ。

それに反して理学療法士はほとんどが20代の若者。二人セットでヨチヨチ歩く姿は、ペンギンの行進を思わせる。理学療法士は身体をほぐしながら、心もほぐしている。どこの出身？どんな仕事をしたの？家族は？などさりげなく話を聞き出していく。

若者たちは豊かな人生経験から学べると言い、おそらく高齢者は自分の過去を語りながら自ら癒されているのではないか。

私は彼らにこの仕事を選んだ動機を聞いてみた。自分がスポーツで怪我をしたのがきっかけという人、おじいちゃんおばあちゃんが好きで高齢化の時代でもあるので、という人。そして今この仕事を天職と思えているという人に出会った。これからの医療界で彼らの担う分野の大きさを思った。

骨の子供

入院して一ヶ月がたった頃、毎

週撮っていたレントゲンに、白い影が現れた。ポキッと折れて8ミリずれた恥骨の周りに霞のような白いものが集まっている。医者が「これが『骨の子供』で、折れた骨の周りに集まって治してくれるんだよ」と説明してくれた。自然治癒力とか、自己回復力ってこういうことか。こんな歳になっても自分の体を自ら修復して健全になつて生きようとしていることに少なからず感動した。

そういえば先日テレビで、線路ぎわの草むらの中にじつとうずくまっている鹿が写っていた。人が近づいても全く動こうとしない。

私は勝手に想像をめぐらせた。鹿は何かのトラブルで骨折したに違いない。そしてじつと安静にしていれば、体内で「骨の子供」が集まってきて骨折を治してくれるのを知っているに違いない。だから人間が近づいてきても強い決意をもって動かさずじつと対峙していたのだと。

レントゲンで「骨の子供」が写っていた頃から、私の痛みにも変化が起こった。足を動かすと股関節にピリピリとした痛みが走っていたのがやわらいだ。その代わり突っ張るような痛みになった。これは

筋肉の痛みである。これと向き合うことこそリハビリの目的である。緩めて、伸ばして、鍛えて、骨とともに体の動きをスムーズにする筋トレなのである。

自立へ

医師も看護師もリハビリでも立場は違っても言うことは同じだ。

「歩いて家に帰ってもらおうこと」なのだ。自分の足で歩いて帰り、帰ってからの生活に困らないように毎日のリハビリはプログラムされる。階段の上り降り、お風呂に入る練習などまさにそれである。

まずトイレの自立が第一歩だ。ベッドから車椅子に移ること。つかまり立ちができること。そして手摺から手を離せること。這えば立て、立てば歩めの親心、である。私の場合、ベッドのプレートに「トイレの自立」と書かれた時は、誇りを取り戻したような安心感を覚えた。

4人部屋に移ってしばらくしてから、カーテンで仕切られた隣の部屋に88歳の女性が入院してきた。家で夕食のあと立ち上がった途端に崩れるように倒れて、あちこちの骨折をしたらしい。「あのまま

終わりになればよかったのに」と何度かつぶやいていた。「こんなにあちこち折れているので、私はもうダメ」とリハビリにも乗り気でなかった。私は「できないことを嘆くより、できたことを喜ぼうよ」と思い切つて言ってみた。

彼女は何か感じてくれたのか、ベッドの上から車椅子に座る時間が増えた。車椅子でトイレに行くようになった。痛いのを我慢して頑張る姿を見て私は嬉しかった。

入院して55日目、何とか自分で歩けるようになった私は退院の時を迎えた。

別れの時私は、
「あなたも歩いてうちに帰ってね。その時はあなたの家に遊びに行くから」と約束した。彼女はうなずいて住所を書いてくれた。



画・渡邊義孝氏